

FOREWORD

巻頭言

生涯一環学習で attitude を学ぶ

患者が、最善の薬物療法を有効かつ安全に受けられるように、あらゆる手助けをするのが薬剤師の職責である。そのための能力・適性を教育することを大目標として、2005年までの4年制薬学教育とは目的も内容も異なる新しい6年制の薬学部(薬剤師)教育が2006年から始まる。今や、それができないという理由を探したり論じたりする時期ではない。薬科大学は、薬剤師実務に入るために必要な能力・適性が得られるように、新しい教育をすることを約束して新入生を受け入れ、その約束に反してはならない。

しかしながら、薬剤師の業務内容が一昔前とはすっかり様変わりしてしまったことに加えて、業務に関連する知識や技術も日々進歩し変化するので、薬剤師が実務で必要な知識、技能、心構え(knowledge, skill, attitude)に関するすべてを教えられるような専門教育プログラムはない。これらは、適切な大学教育を土台として、現場教育、実務経験、および「生涯学習」の連携を通じてのみ身につけることができる。薬剤師の職責遂行のためには、学習に今や「卒前」、「卒後」という区別はなくなり、生涯一環と考えるべき時代となった。

一環学習の中で、卒前は「教育」

薬剤師認定制度認証機構理事長

内山 充

UCHIYAMA Mitsuru



であり教える側の責任が大きく、そこでのでき次第によって以後の学習成果が大きく左右されるが、卒後は「研修」であって当事者の自己責任が大きい。卒後は、受動的でなく能動的でしかも個々の薬剤師業務に適する学習を目指して、他人に頼らず自分で学習過程を組み立てる必要がある。

生涯学習は業務の合間に行うものではない。知識社会では、働くことは学ぶことと一体であるから、どんな職種にあっても薬剤師の学習は仕事の一部である。何を学ぶべきかは自らの判断だが、知識と技能は学ぶ機会に恵まれ学びやすい。しかし、attitudeは学び方が最も難しい。Attitudeは「態度」と訳され、薬剤師に必要な教育の1つとして論じられることがあるが、本来は、業務に関する心構えや、患者に対するあるいは医療に携わる姿勢や倫理観や信念であ

る。確かに態度はattitudeを反映することが多いが、態度だけからその人の持っている信念や倫理観を判定することはできない。ましてや、練習によって態度が上達しても心構えが習得できているとは思えない。

Attitudeは、生涯を通じて学ぶ知識の積み重ねにより形作られるが、薬剤師のあらゆる業務行為を支えており、また患者あるいは国民から薬剤師が最も強く求められているものでもある。われわれは常に正しい心構えを持ち、患者の気持ちになって事に当たる姿勢を崩さず、自然にそれが態度に現れるようになる必要がある。そのための手引きやマニュアルは特にないが、先任者や指導者の中で自分もこうなりたいと思えるような人のまねをするのが1つの良い方法である。

また、自己の見識や能力に安住してこのままで良いと思っただけではいけない。自分の行った職務行為について、もっと患者のQOL向上に役立つ良いやり方はなかったかを考えることに、いつも一定の時間とエネルギーを注ぐことが必要である。自省の心を絶やさず、自制の力を発揮して、生涯を通じてattitudeを磨くよう努力を続けなければならない。